「離島」 甑（こしき）島の旅　土代　武

１１月後半３泊４日で鹿児島の甑列島を旅した。コロナ禍の第５波がとりあえず小康状態となったが、まだまだ世間は堂々と旅行に出かける雰囲気ではなかった。しかし海外旅行が当面不可能な今、普段なかなか行けなかったところに出かけたいという思いは募り、離島甑島に出かけることになった。

いざ行くと決めても甑列島の情報は少ないのでまず梅田にある鹿児島県事務所まで資料をもらいに行った。地図と宿泊施設リスト、交通関連情報を手に入れ、旅行計画を立てる。甑列島は上、中、下の３島が南北に連なり、最近橋ができてすべて連結したので便利にはなったが、それでも日に7～8本のコミュニティバスがあるくらいでコース選定も自ずから限定されてくる。本土からの連絡船のコース、時間も考えて下甑から上甑に北上するコースと決める。

まず新幹線で川内（せんだい）まで行き、バスで川内港へ。川内川の河口にある川内港のすぐ北側には大きな火力発電所がある。海に出てみると南側海岸には川内原発の原子炉２基がそびえている。海面からそんなに高くないところに建てられているので、大きな津波が来たらひとたまりもないのではないだろうかと心配になる。そしてここは桜島、阿蘇など名だたる巨大火山に近いので余計に心配だ。６～７０００年前の鬼界カルデラの大噴火で南九州の縄文文化が壊滅したことを思い起こさせる。原発の背後の山並みには風力発電機がずらりと並んでいる。こうしてみると川内川河口は巨大な発電地帯となっているわけだ。

そこから高速船で 1 時間余りで下甑島中部の長浜港に到着。山を背負った小さな集落なので予約していた民宿はすぐに見つかった。なかなか貫禄のある女性が切り盛りしていて、最近の甑観光の状況を聞く。コロナ禍によって旅行者は激減し、高齢者が何とか維持してきた民宿もかなり閉鎖してしまったとのこと。確かにリストにある民宿に予約の電話をしても休業中というところもあったし、県外の人を泊めるのは色々と言われるなどの反応もあり、苦境が想像できた。

長浜港には「宣教師上陸の地」の碑があった。薩摩藩の招請により１６０２年にドミニコ会のモラレス神父が上陸し数年間布教活動をしたものの、のち禁教となり追放されたという。宿では海の幸いっぱいの夕食に満足。翌朝下甑南端に位置する手打集落に向かう。海沿いにしばらく走るとすぐに山道に入り、峠を越えると美しい湾を包み込むように開けた手打の集落が見えてくる。

湾の東端に位置する港は今は本土との連絡船がなくなり、何隻かの漁船が停泊しているだけで少し寂しいが、その港に面した民宿に到着。ここの民宿のおばさんは耳が少し遠いが大変話好きで、久しぶりに客を受け入れたらしく、若いころ関西に住んでいたころの思い出、手打の診療所に２０１７年まで３９年間にわたって勤務していて、孤島の医師＝Ｄｒコトーのモデルとなった（テレビドラマでは与那国島とされていたようだ）瀬戸上医師のことも懐かしく話していた。へき地医療に全力で取り組んだ瀬戸上医師への住民の信頼は厚く、送別会は２回にわたり盛大に行われたという。

手打の集落は武士を各地に分散居住させる薩摩藩独特の「外城制」があり、そのうちの二つがここ手打と上甑島の里集落である。武家屋敷の通りは石垣が続き当時の雰囲気をしのばせる。しかし過疎の波が押し寄せているのだろう、更地も点々とみられる。その一角に森進一の「おふくろさん」の歌碑が立っている。彼の母親がここの出身だったらしい。武家屋敷を抜け湾の西側から釣掛崎灯台を目指す。山道を抜けた所に広大な海を背景にした絶壁の上に立つ灯台が見える。はるか向こうは中国大陸になるはずだ。

その近くには「キリシタン殉教地」の碑があるはずだが道がわからず行けなかったのは残念。甑島は天草や長崎との交流が盛んであり、またモラレス神父の布教などもあってかなりキリシタンも多くいたようだ。のち禁制期に入り彼らが処刑されたことを記念するものだそうだ。

翌朝早く民宿前から上甑に向かうバスに乗る。宿のおばさんがわざわざ外に出てきて窓越しに手を振ってくれる。下甑と中甑をつなぐ最近完成した橋を渡る。青い海と緑の山々が目に映える。さらに橋を渡り中甑港に到着。ここから甑観光の目玉となっている断崖クルーズが出ている。今渡ってきた橋をくぐり、また遠望しながらクルーズ船は下甑島北西岸の鹿島断崖に向かう。高さ１００ｍ にも及ぶ断崖と奇岩が連続し、断崖の真下まで近づくとそびえたつ岩々に圧倒される。とにかく見ごたえたっぷりのクルーズだった。

港に戻り甑列島全体の中心ともいえる最終宿泊地の里集落に向かう。ここはイタリア語の「トンボロ」（函館のように陸地と島が風や波によってできた砂州でつながった土地）の上に集落ができている。小高い所に上るとその地形がよくわかる。ここの武家屋敷地区は手打集落よりも石垣の原型がよく残っている。旅館では夕食が準備できないということなので近くの居酒屋で取ることにする。不愛想な大将で最初は緊張したが、別に不機嫌ということでもなく、それなりの気配りもしてくれ、料理も手ごろな値段でおいしかったのは幸いだった。食事後外に出てみると近所のおばさんが空を見上げ、我々にも見るように促す。ちょうど部分月食が始まったのだ。島での一つの思い出として残る夜だった。

最終日は午後の船の時間まで自転車を借りて「長目の浜」の観光とした。坂道を息を切らせながら登りきった展望台から見ると、入り組んだ海岸線が波によって砂や石で海から切り離され、湖として残されたもので、白い海岸が続く内側に湖が４つ連なる景色は絶景だ。先に見た鹿島断崖の荒々しさとは対照的に穏やかな優しい景色だ。

展望台からは眼下に長目の浜、右手遠くに天草、背後には九州本土がよく見える。甑は孤島というイメージが強かったのだが、肉眼でよく見える外の世界との交流も盛んだったことが想像できる。これは現地に来て初めてわかる実感ということだろうか。少し不便ではあるが景色もよく、魚もおいしいのでぜひ行く価値のある所だと思う。